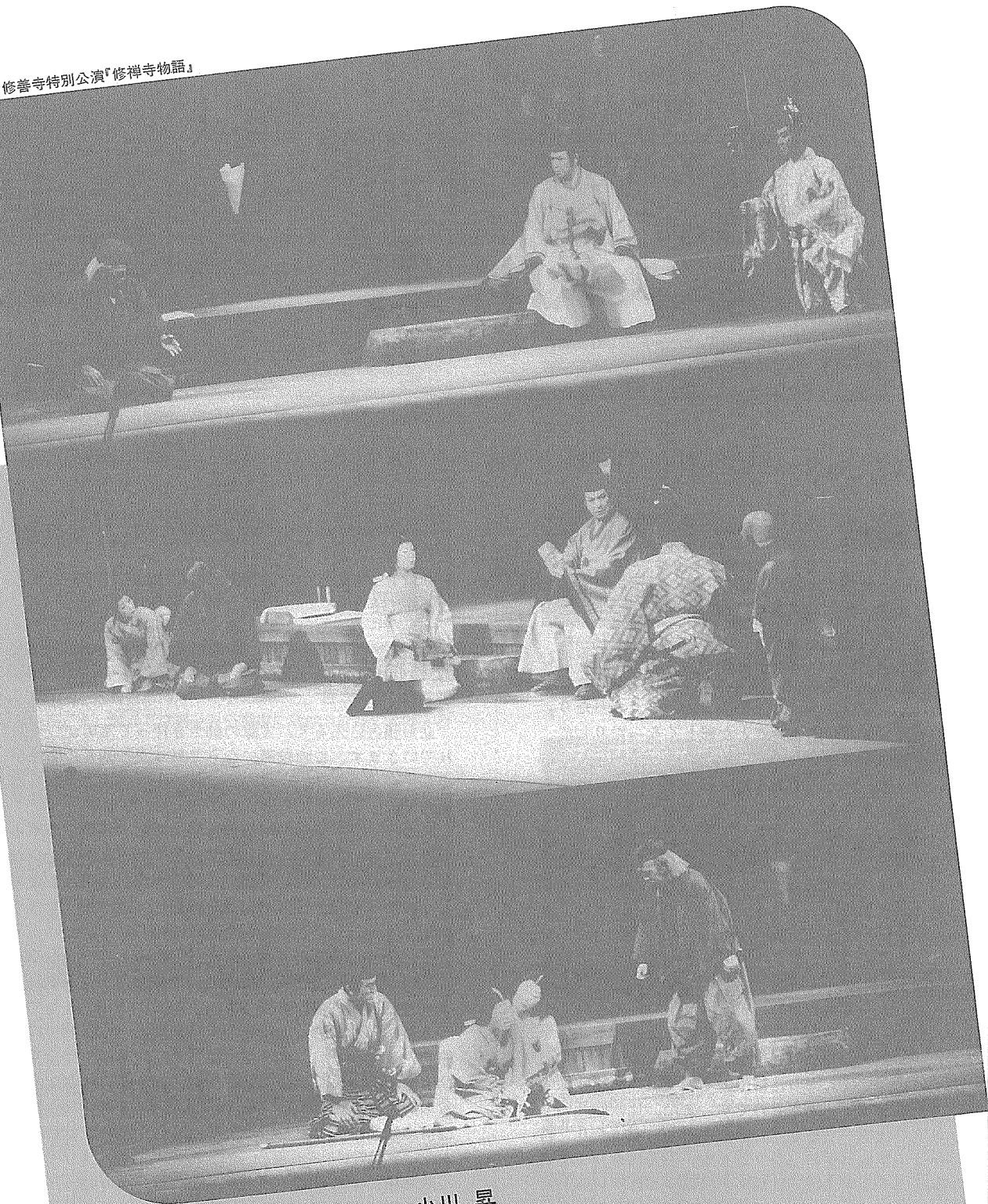


▼修善寺特別公演「修禅寺物語」

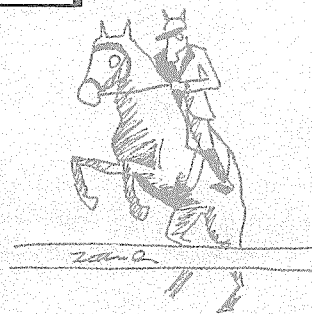


- 舞台照明づくりの実際——小川 昇
- 舞台用語解説——岩崎令兒

舞台照明づくりの実際

『修禅寺物語』を題材として③

小川昇



稽古に入る◆◆◆

◆◆読み合わせ

本来は読み合わせの前に、作者あるいは演出家がスタッフ、キャストの全員に台本を読んで聞かせる「本読み」という段階があります。

本読みを聞くと、その芝居の基本のようなものを掴むことができたものですが、最近はこの本読みがあまりおこなわれていないようです。再演ものが多くなったり、稽古の始めに全員が集まるのが難しくなったりして、本読みができなくなったのでしょうか。

私は若い頃、坪内逍遙先生の本読みを聞いたことがあります。ト書きもきちんと読んで、セリフもそれぞれの役の気持ちの入ったセリフとして聞かせる読み方で、実際に芝居を見ているような気がしたことを覚えています。

今回の『修禅寺物語』では、読み合わせから芝居の稽古が始まりました。

演出家を中心にして、役者がそれぞれの自分の持ち役のセリフを読んでいきます。もちろんただセリフを読むのではなく、その人物の心理状態やセリフに伴う動きなどを考え、その言葉が誰に対するセリフで、どんなニュアンスを含んでいるものなのかを把握しながらセリフを読んでいきます。同じセリフでも強い調子の場合と、弱い調子の場合では人物の性格や、その場面の人物関係の見え方が異なったりするものです。また、比較的長いセリフの中ではトーンを変えることが必要になったり、言葉をかける対象が変わったりします。役者はセリフを読みながら、その意味と芝居の中での位置づけを理解し、自分のものにしていくこととなります。

今回の『修禅寺物語』は、鎌倉時代を舞台にして明治時代に書かれた作品ですので、現在の日常生活では使われない表現や言葉の言い回しが随所に見られます。そうした表現や言い回しがこの作品にリアリティを与え、同時に深い奥行きと格調を醸し出しています。役者はそうしたセリフを、借物ではなく身についた言葉として表現することが求められます。

照明家は読み合わせの稽古に立ち会い、実際に役者の声を通してセリフを耳にすることで、台本を読んだ時よりも一層具体的な形で作品に接することができます。そして、演出家の駄目出しの言葉から、演出家がこの芝居をどう作ろうとしているのか、どんなイメージを持って取り組もうとしているのかといった演出意図を把握することができます。

立ち稽古◆◆◆

立ち稽古に入ると、実際の動きを伴って芝居がつけられていきます。この段階になるとセリフと動きの関係が少しずつ決められていくわけですから、稽古は舞台装置を考慮にいれておこなわれることとなります。

したがって、本来ならば稽古場に概略の装置をつくるのが本当なのですが、一般の稽古場ではそれがなかなかできませんので、やむを得ず装置の平面図にそってビニールテープなどで装置の位置を設定し、机や椅子などの代用品を使用しながら稽古を進めていくこととなります。

このように実際の舞台装置を想定しておこなわれるわけですから、立ち稽古では舞台の原寸大の広さが取れるような広い稽古場が必要です。

立ち稽古は役者の演技をつくりあげていくと同時に、照明、音響などのスタッフの仕事をつめていく場でもあります。この連載の第1回で稽古に入る前におこなわれるスタッフ会議のことを述べましたが、スタッフ会議では演出家を中心におおまかな演出方針が話し合われました。

立ち稽古に入ると、稽古を見ながら演出方針に基づいて、この場面の明りはどうつくるのか、どんな効果音が必要なのかといったように、個々のスタッフはより具体的に仕事を進めていくこととなります。そうしたひとつひとつの事柄を演出家や他のスタッフと検討し、確認し、また修正しながら決定していくのです。

したがって、立ち稽古に入ると照明や音響、舞台美術などのスタッフも参加し、稽古の出来上りをみながら、それぞれの仕事を進めることとなります。

◆◆人物の動きを把握する

照明家はこの立ち稽古を見ながら、人物の動きを把握しなければなりません。舞台のどの部分でどんな芝居がおこなわれるのか、その芝居や人物をどう見せていくのかということを的確につかみ、考えることが具体的な明りづくりの第一歩になります。

人物の動きを把握する方法の一つとして、舞台の平面図に実際に人物の位置や動きを書き込む方法があります。

これは、舞台の平面図に升目を書き入れたものを数枚用意し、芝居のポイントごとに人物の位置や動きを書き入れていき、その人物を見せるためにどのような明りが必要かを考えていきます。また、明りをつくる上で重要

な要素となる燭台などの位置もその場面ごとに書き入れたりします。こうした図面をつくり芝居の流れを理解していくと、芝居のポイントとなるところも理解できますし、升目によって細かく区切られたアクティングエリアのどの部分に明りが必要かということが即座に分ります。このようにしっかりと人物の位置を把握しておく、現場での仕込みで明りのあたりを決める時もスムーズにおこなうことができます。

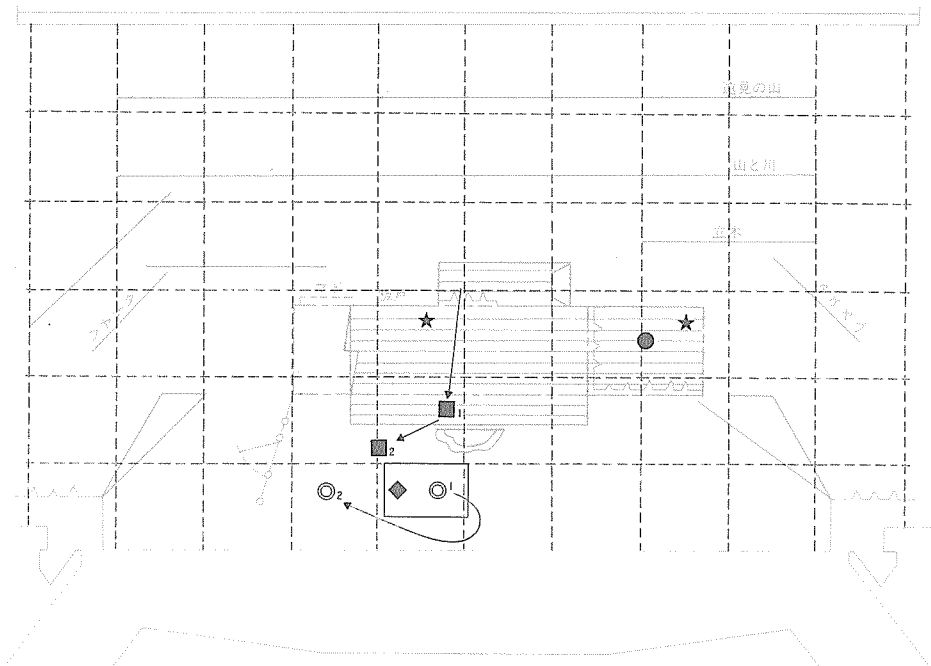
また、稽古が進むなかで、役者の動きは何度も修正されていきますが、どのような意図でそうなったのかを理解していくと、演出家がある場面をどう見せようとしているのかもわかりますので、照明家にとってその場面の明りをどうつくるかということを考える時の参考になります。

◆◆人物の動きを把握するための図面◆◆

第1場

幕が開くと夜叉王の住家の庭のやや下手寄り、かつら(◎-1)とかえで(◆)が紙砦を打っています。夜叉王(●)は簾の降りた仕事部屋で面づくりに没頭しています。職人を見下すかつら(◎-2)の言葉を聞きとがめた春彦(■-1)が座敷の奥の暖簾をかき分けて登場し、庭に降りて(■-2)かつらに詰め寄りませす。幕開きの時には、まだ明りは入っていませんが、夜叉王の仕事部屋と座敷の2箇所に燭台(★)が置かれています。

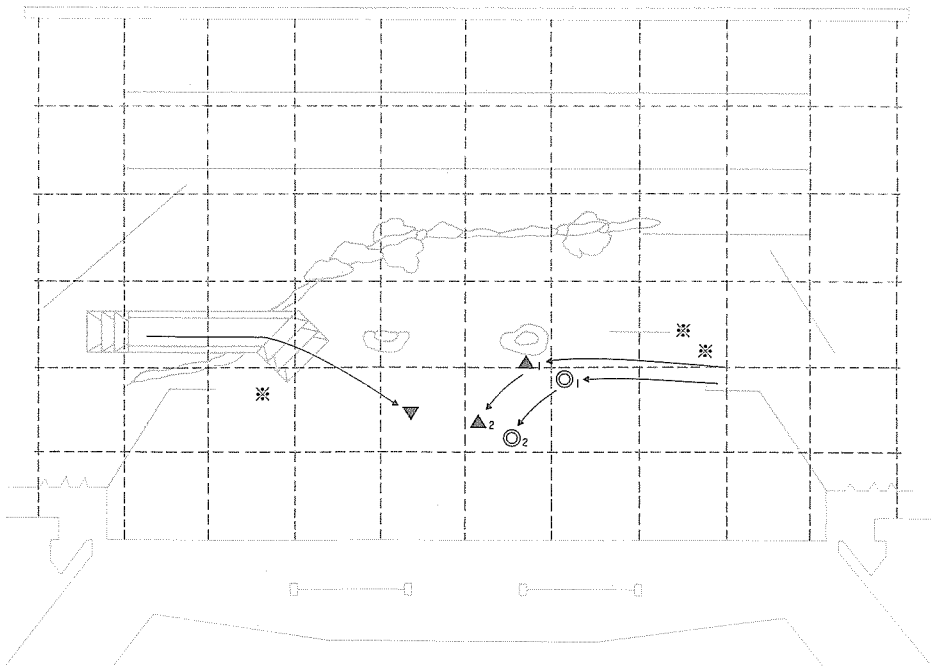
- 夜叉王
- ◎ かつら
- ◆ かえで
- 春彦
- ★ 燭台



第2場

僧と五郎が退場した後、月明りの中に頼家(▲)とかつら(◎)が上手から登場します。舞台中央の岩に腰をかけた頼家(▲-1)とその側に控えるかつら(◎-1)。かつらは頼家に仕えることの嬉しさを語り、頼家はわが身の不運が新しい恋によって癒されることを喜びます。虫のすだく音が消えて、頼家(▲-2)とかつら(◎-2)は舞台前に進んだところへ、下手より行親(▼)が登場、また物陰には軍兵(※)の姿が見え隠れします。

- ▲ 頼家
- ◎ かつら
- ▼ 行親
- ※ 軍兵



◆◆明りのキッカケを決める

立ち稽古を繰り返しながら芝居が少しずつかたちを見せてくると、場面ごとの明りも次第に具体的なプランとしてできあがってきます。

また、役者の動きが決まってくると明りの変化についても、おのずから決まってくる部分があります。

これは舞台音響の場合でも同じなのですが、立ち稽古が進んでいくと効果音のテープを用意し、役者の動きに応じて鐘の音を入れるなど、効果音の入るキッカケが決められていきます。照明の場合は実際に明りを入れたり、消したりできませんので、稽古の中で必要な場合は、演出助手などのスタッフが「ここで照明が入ります」「ゆっくり暗転になります」というように明りのキッカケを声で入れていきます。

このように稽古を積み重ねて芝居ができあがっていく中で、明りの変化やキッカケは自然と決まってくるので、立ち稽古の時はプランナーだけでなくオペレーターも一緒に立ち会い、役者の芝居を見ながら「このセリフの時から少しずつ夕暮れの明りを落としていき、この役者の動きまでに完全に落として、夜の明りに変化させよう」といった明りの変化のキッカケと動きを確認しあうことが必要になってきます。

立ち稽古を通して実際の明りがひとつずつ決められていくわけですから、照明家がこの稽古に立ち会うことは明りづくりの上でとても重要だと思えます。

仕込図の製作

立ち稽古が進み、芝居が次第にできあがってくると同時に、照明のプランも固まってきました。このプランを実際の明りとして実現するために、照明の仕込図の製作を始めなければなりません。

仕込図を製作するにあたって重要なことは、これまでの過程でつくりあげてきたプランをどう実現するかというのを第一に考えることです。

実際の仕込図の製作は、劇場の照明設備やバトンの位置などを基にして図面に書き起していきますが、それは単に劇場の設備に合わせて仕込図を製作するというだけではありません。

基本的に照明プランは劇場の設備に関係なく、その芝居のためにつくられているわけですから、プランを実現していくためにまず劇場の設備にあてはめていき、使える設備は使い、足りないものをどうするかと考えていくべきです。

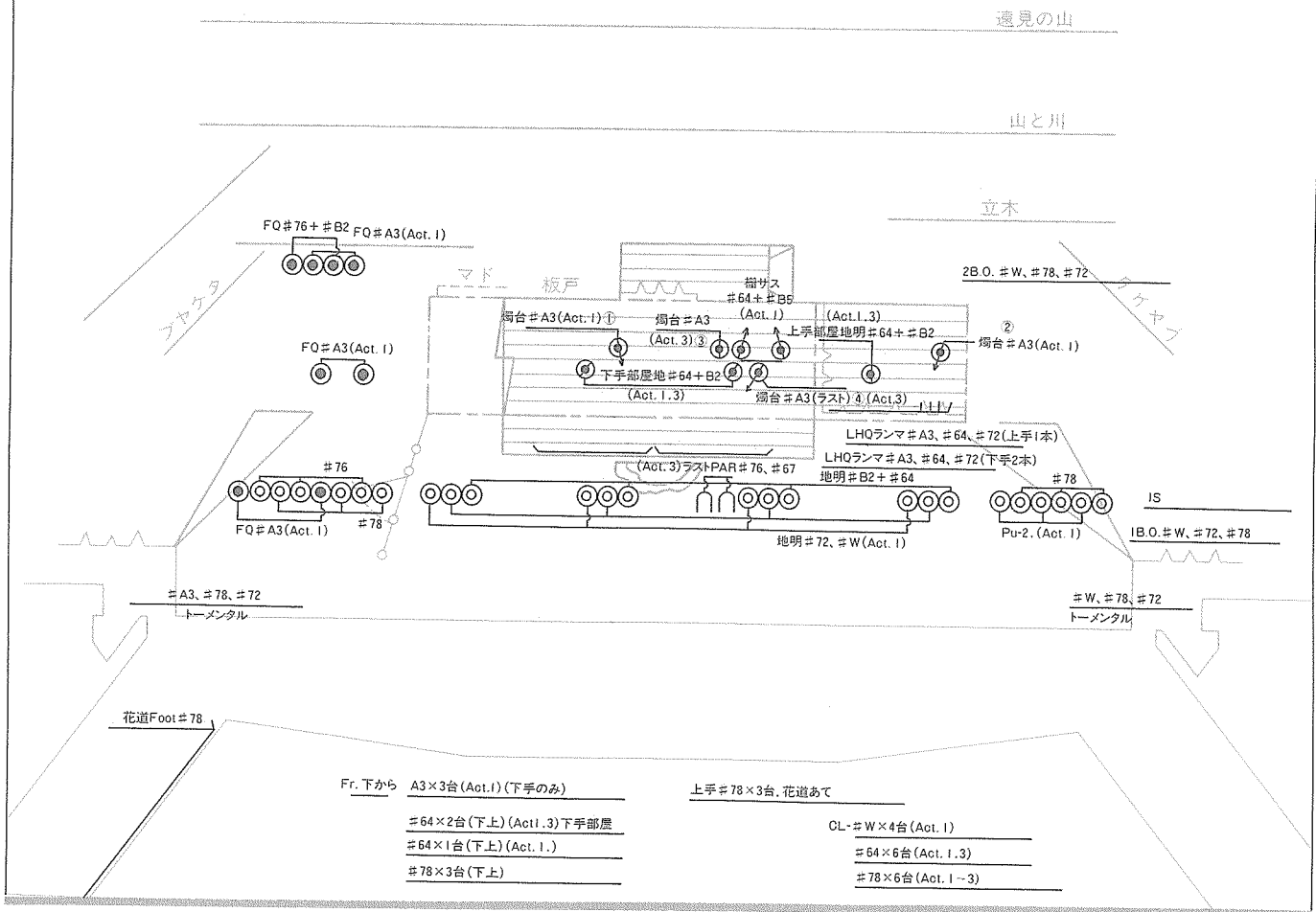
実際に、足りない設備を架設の設備で補ったり、既設の照明用のバトンの位置ではプランどおりの明りができないので、装置家と相談の上、装置用のバトンに照明器具を吊るといったこともしばしばあります。

仕込図を製作する時は、あくまでもプランを中心に考えるようにしてください。

このようにして、地明り、 Horizont に対する明り、

第1・3場仕込み図

UH #71、#72、#78、#W
LH #72、#72、#78、#W



部屋の中の明り、燭台の明り、装置に対する明り、前明りなどをつくるために必要な照明器具を図面上に書き起こしていきます。同時にその照明器具に使うカラーフィルターの色番号も書き込んでいきます。

仕込図を製作する時には、あらかじめ上演する劇場の設備に関する資料は手にいれておきますが、確認のために劇場を実際に見ておくことも必要です。図面上では予測がつかないような問題が現場で発生することがあるからです。

仕込図は稽古の最終段階には仕上げ、この図面に基いて劇場へ持ち込む必要がある器具や備品を揃える準備に入ります。

仕込みと道具調べ

◆◆照明の荒仕込み

さて、稽古場を離れ、いよいよ劇場での仕事に入ることになりました。

劇場でおこなわれる最初の仕事は仕込み作業です。仕込み作業は照明だけでなく、大道具を仕込む「道具調べ」や音響の仕込みなどがありますので、それぞれのスタッフの仕事をできるだけ合理的に段取りよく進めなければなりません。

特に照明の仕込みと道具調べは作業の進行上、お互いに協力し合わなければならない面がありますので、コミュ

ニケーションをしっかりと取り、事故などのないように進めることが必要です。

照明の仕込みと道具調べは、全体を通して同時進行でおこなわれることになります。しかし、こまかく見ていくと、大道具が飾り込まれる前にやらなければならない照明の仕事や、大道具が飾り込まれた後でなければできない照明の仕事があるといったように、その仕事の内容はさまざまです。したがって、単に同時進行といっても、それぞれの作業の進行状態をうまく調節しながら、十分に時間をかけておこなうことが大切です。

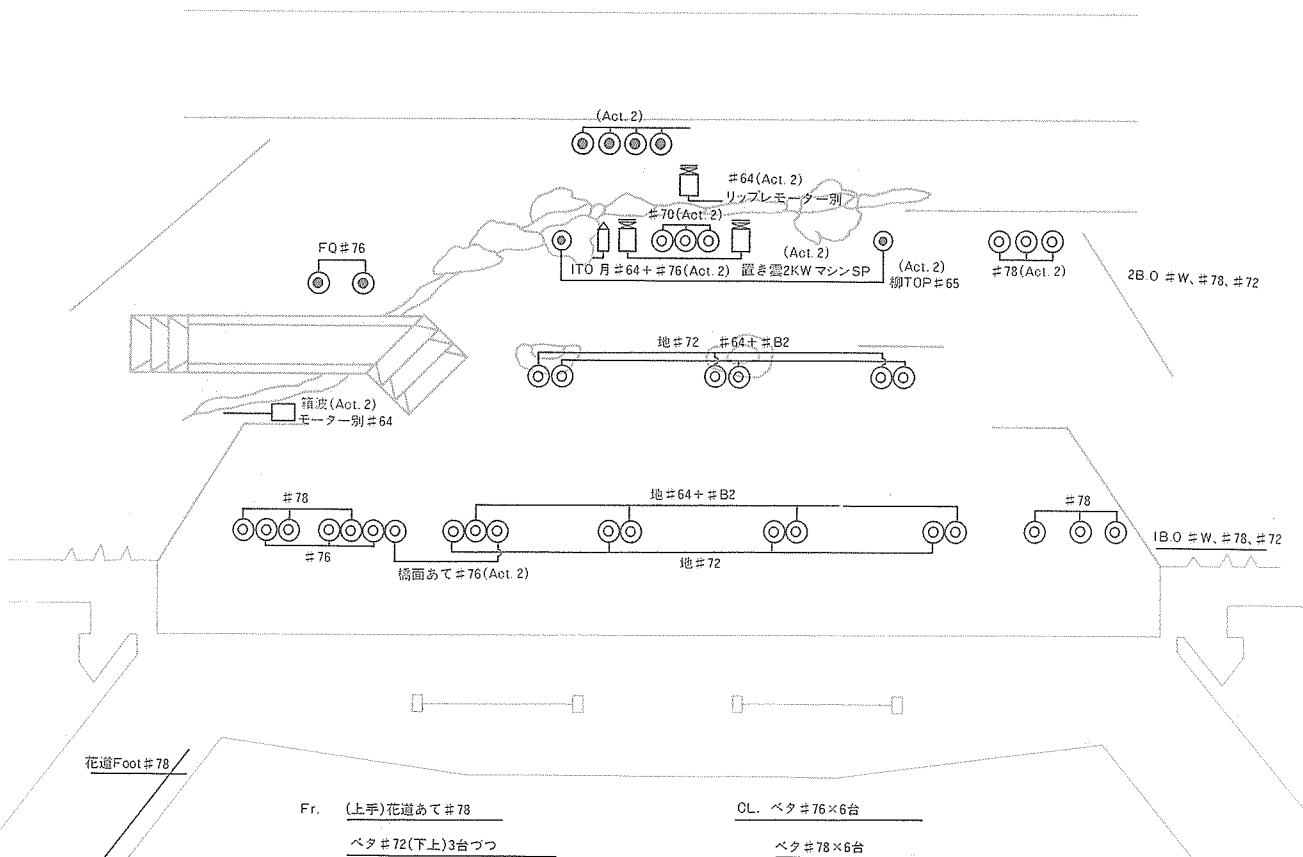
まず、大道具が組まれる前に、仕込図にそって照明器具を所定の位置に吊ったり、指定された番号のカラーフィルターを照明器具にセットするといった照明の仕込みを先行させます。これは、先に大道具が組まれてしまうと、スポットライトを吊るためのバトンを降ろせなくなるからです。まだ何もない舞台の上に装置の平面図に合せてビニールテープで大道具の位置を設定していき、その位置を目安にして、吊り込んだスポットライトのフォーカスの広さやあたりを大体決めながら照明器具を仕込んでいきます。こうした荒仕込みをすませて、大道具の搬入を待ちます。

◆◆大道具の建て込み後の作業

大道具の建て込みが終わると、先に仕込んでいた照明器具のあたりの修正をおこないます。実際に大道具が組

第2場仕込み図

UH #71、#72、#78、#W
LH #72、#78、#W



まれると、床面のビニールテープを基に決めた明りのフォーカスの広さや角度を修正する必要が出てくるからです。また、部屋の明りをつくるために使用しているシーリングライトやサイドフロントライトなどの前明りが装置の屋根や壁の部分にあたっていたり、室内の明りとしてつくった明りがほかの余分な所にこぼれていたり、修正しなければならない箇所が出てきます。

その他、装置の裏側に照明器具を設置する欄間吊りの仕込みや、背景が描かれた書き割りなどの装置にタッチをつけて遠近感やリアリティをつくりだすための明りづくりがあります。

また、『修禅寺物語』では燭台や燈籠が明りづくりの上で重要になります。こうした灯入れの装置を準備します。

この燭台や燈籠は手元スイッチで明りがつくように準備されました。役者が明りをとすという演技の中で自然に明りを点灯できるように工夫されています。こうした灯入れの場合は、調光室からの操作でおこなうよりも、役者にまかせたほうが演技とのタイミングがズレないで明りを入れることができます。この明りの点灯をキッカケにして、調光室の操作で部屋の全体の明りをつくるようにすると、スムーズに舞台の明りをつくるができます。

明り合わせ

舞台の装置が本番どおりにできあがったところで、「明り合わせ」に入ります。

明り合わせは、仕込み作業に連続しておこなわれるもので、役者に対しての明りを細かくつくっていくことを目的におこなわれます。

道具が全て飾られて舞台の明りができた中で、役者はどう見えるかということは舞台照明の最も重要な役割です。このために実際に本番どおりの衣裳をつけ、メイクをした役者にその場面の位置についてもらい明りをつくりあげていきます。こうして、明り合わせでは各場面の決まりの明りを、中抜きしながら順番に細かくつくっていきます。明り合わせは、いわば照明の舞台稽古といえるもので、大変時間がかかる作業ですが、十分に時間を取って取り組みたいものです。

役者の都合がつかない場合は、スタッフが代役で舞台に立ったり、衣裳を舞台に置いたりしておこなうこともあります。

舞台稽古

舞台稽古は役者の演技だけのものではなく、舞台の全てが本番と同じようにできるまでおこなわれます。舞台稽古が完了したということは、本番と同じ舞台ができあがったということです。

したがって、舞台の転換、効果音のキッカケや音の大きさの設定など、それぞれのスタッフの仕事も完全に仕上がるまで何度も繰り返しておこなわれます。

照明も芝居の流れに伴う明りの変化がスムーズにできるまで繰り返したり、キッカケの確認や細かい明りの修正などを本番に向けて仕上げていきます。照明の修正のために、舞台の稽古を止めることもあります。

このようにして舞台づくりは進められ初日の幕を開けることとなります。

今回の『修禅寺物語』も、時間的な制約などもありましたが、無事に幕を開けることができました。

藤沢市民オペラの貴重な成果「ファウスト」公演

— 沢田祐二氏、2度目の日本照明家協会賞受賞 —

各都市の文化事業のなかでも、優れたクオリティと豊かな創造性で高い評価を得ているのが神奈川県藤沢市の藤沢市民オペラです。

藤原歌劇団に所属し、著名な指揮者として活躍されていた故福永陽一郎氏の発意から誕生したこの市民オペラは、今日では藤沢市、藤沢市民会館、そして市民会館友の会といった地元の有志の力に支えられ発展し、人々の生活に根付いた、市民の誇りともいえる文化活動として親しまれています。

昭和58年に藤沢市民会館の開館5周年を記念して上演された第1回の市民オペラは『フィガロの結婚』。以来、『セヴィリアの理髪師』『カルメン』『ウィリアム・テル』『アイダ』『椿姫』などの名作を次々と上演する一方、地元江ノ島の伝説を題材にした創作オペラ『竜恋譜』(作曲・三枝成彰)に取り組むなど意欲的に、着々と舞台成果を積み重ねてきました。そうした活動に対して、昭和61年には音楽之友社賞が贈られています。

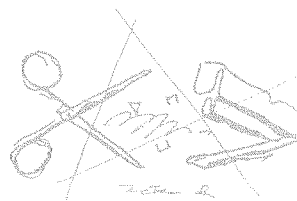
藤沢市民オペラの特徴は、その名にふさわしくオーケストラ、コーラス、バレエといったオペラを構成する主要な部分を、藤沢市民交響楽団をはじめ、地元の合唱団やバレエグループなどの大勢の市民が担っているということです。

また、舞台づくり、照明、音響といったスタッフの仕事面でも、市民の参加と協力が大きな力となっています。

昨年10月に藤沢市制50周年記念公演オペラとして上演されたグノー作曲の大作オペラ『ファウスト』は、舞台、オーケストラ、合唱の規模が大きいこと、バレエが不可欠なこと、力のあるソリストの出演が必要なことなど、さまざまな問題がありました。しかし、1月にオーディションをおこない、10月の上演に向けて活動を開始し、市民の有形無形の力を得ることで、この規模の大きな作品の上演を実現することができたのです。

そして、もう一つの話は舞台照明を担当された沢田祐二氏が、この『ファウスト』の照明デザインで第10回日本照明家協会賞の舞台部門で大賞・文部大臣奨励賞を受賞されたことです。(日本照明家協会賞については、P.9の「平成2年度日本照明家協会賞決定」に詳しく記載されています)

沢田氏にとって第1回の大賞に続いての2度目となった今回の受賞は、市民オペラ『ファウスト』公演の成功にいつそう花を添えるものとなりました。



実際の舞台から

照明プランに基づいて仕込み、明り合わせ、舞台稽古と進み、舞台照明が完成するわけですが、実際にはこの過程の中で最初の照明プランを変更していくことがしばしばあります。

『修禪寺物語』でもいくつかの変更がありました。その変更の理由と現場での対応について最後に述べてみたいと思います。

◆◆大道具の変更

照明プランは道具帳を基にしてつくられています。ところが、この道具帳と実際に飾られた装置が違っていることがあります。

稽古が始まる前につくられた道具帳のプランが稽古の過程で修正されたり、変更されたりすることはよくあることです。この場合は照明のスタッフも稽古場で道具帳のプランの変更が提案され、決定される時に立ち会っているわけですから、変更された装置に対応できるように照明プランをそのつど手直していきます。

ところが、たまたま連絡などが不十分だったために、実際にできあがった道具を見て初めて道具帳との違いが分かるということが往々にしてあります。この時点ですでに道具帳を基にした照明プランで照明器具の荒仕込みが終わっていますので、その対応も大変になってきます。

第1場では、上手側の装置の一部が変更されていました。道具帳では岩の書き割りになっていたものが、実際には垣根になっていたのです。これは芝居の本質にかかわるような大きな変更ではありませんでしたので、照

明の対応もそれほど大変ではありませんでした。

当初のプランでは岩の書き割りに夕陽の明りを少し当てる予定でしたが、この明りをカットすることで済みました。

◆◆夕陽の明りの使い方

第1場では夕陽の明りの使い方について、当初のプランからの変更がいくつかありました。

この場の夕陽は舞台全体に広く当てるのではなく、夜叉王の住家を取り囲む竹藪や樹木の切れ目から、いわゆる木の間もれの感じで部分的に当るように工夫しました。これは写実の明りとしてもそうあるべきですが、舞台照明の見るための明りとして有効に夕陽の明りを使うためでもあります。

第1場の幕開きでは、夕陽の当たっているところは大きくわけて次の3つの部分と考えられます。

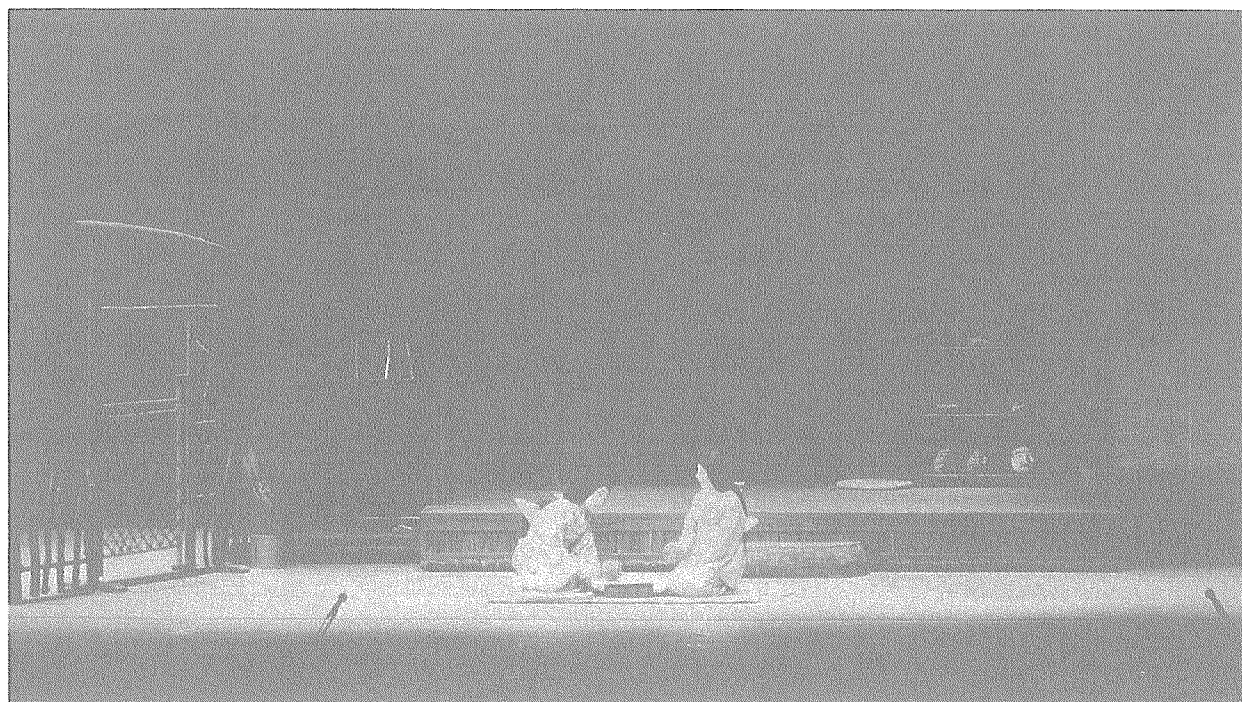
1. 夜叉王の住家の入り口や門のあたりから、かつらとかえでが紙粘を打っている芝居がおこなわれる場所を中心にした舞台前面のやや下手寄りのあたり。
2. 上手の夜叉王の仕事場に降ろしてある簾の部分。これは簾を上げた時に仕事部屋の中に明りが差し込むように考慮されています。
3. 下手奥の方から、窓の格子にも当るように差し込む下手奥の部分。

この3つの中で、最初の舞台前面のやや下手寄りの明りは、幕が開いた時のかつらとかえでの芝居を見せる最も重要な明りですから、幕開きの明りのポイントとして当初からプランを考えていました。

しかし、夜叉王の仕事部屋の簾に対する明りと、下手奥の明りは明り合わせや舞台稽古の過程で多少変更していった部分です。

第1幕 幕開きの明り

下手側からの夕陽の明りで、紙粘を打つかつらとかえでを見せるための明りがつくられています。また舞台の下手奥の窓の格子からも夕陽が差し込み、夜叉王の仕事部屋の前に降りている簾にも夕陽が当って、舞台全体の明るさをつくっています。



◆◆簾と仕事部屋の明り

夜叉王の仕事部屋の簾に対する夕陽は、仕事部屋の中の明りを考える過程でつくられた明りです。

夜叉王の仕事部屋の中の明りをどうつくるかということは、前回の「道具帳から明りを考える」でも課題になっていました。

照明プランとしてはある程度の室内の明りをつくるように考えていましたが、この明りによって幕開きの簾が降りた状態の時に仕事部屋の中が透けて見えるのではないかという懸念がありました。

この解決策として実際に舞台の明りをつくっていくなかで考えられたのが、下手側からの夕陽の明りを簾に当てることでした。庭で紙砧を打つかえとかつらの姿を下手側からの夕陽で見せると同時に、夜叉王の仕事部屋の前に降りている簾にも夕陽の明りを当ててみたのです。この夕陽によって、仕事部屋の中の明りをかなり明るくつくっても、簾の中が透けて見えることはありません。また、簾が開かれ夜叉王が登場した時に、この明りが夜叉王の演技を見せる明りとしての役割も果たすことになりました。

◆◆下手奥の明り

次に、下手奥の木立の装置に対する明りにも変更がありました。

舞台の下手奥は大仁の町へ向かう道があると設定されており、春彦は大仁の町へ向かうために下手奥へ退場していきます。

当初の照明プランとしては、下手奥をあまり明るくするようには考えていなかったのですが、道具が飾られて

みると木立の装置が明るい感じで描かれており、木立の向う側には広く開けた田園風景があることを暗示したいと思いました。さらに、最初に考えていたよりも幕開きの舞台を明るくする必要もありましたので、下手奥の木立の方から夕陽が差し込んでいるという明りをつくることになったのです。

また、前に述べた夜叉王の仕事部屋の簾に対する夕陽も、舞台を明るくするために有効な動きをしています。

第1場は夕方から次第に夜になっていくという時間の流れを照明で表現しなければならないのですが、最初に考えていた幕開きの夕暮れの明るさでは、暮れていくにしたがって舞台が暗くなりすぎ芝居が見づらくなると思われました。

そこで、下手奥の木立や夜叉王の仕事部屋の前の簾などに夕陽を当てることで、舞台全体を明るくし、春彦が大仁の町にでかける時には、部屋の中が少し暗くて大仁の町へ向かう下手奥にはまだ夕暮れの明るさが残っている状態をつくるようにしました。

こうした明りの細部については稽古の段階ではわかりません。実際に道具が飾られ、舞台稽古が進む中で修正が必要になってくるものです。

◆◆月の出入りの明り

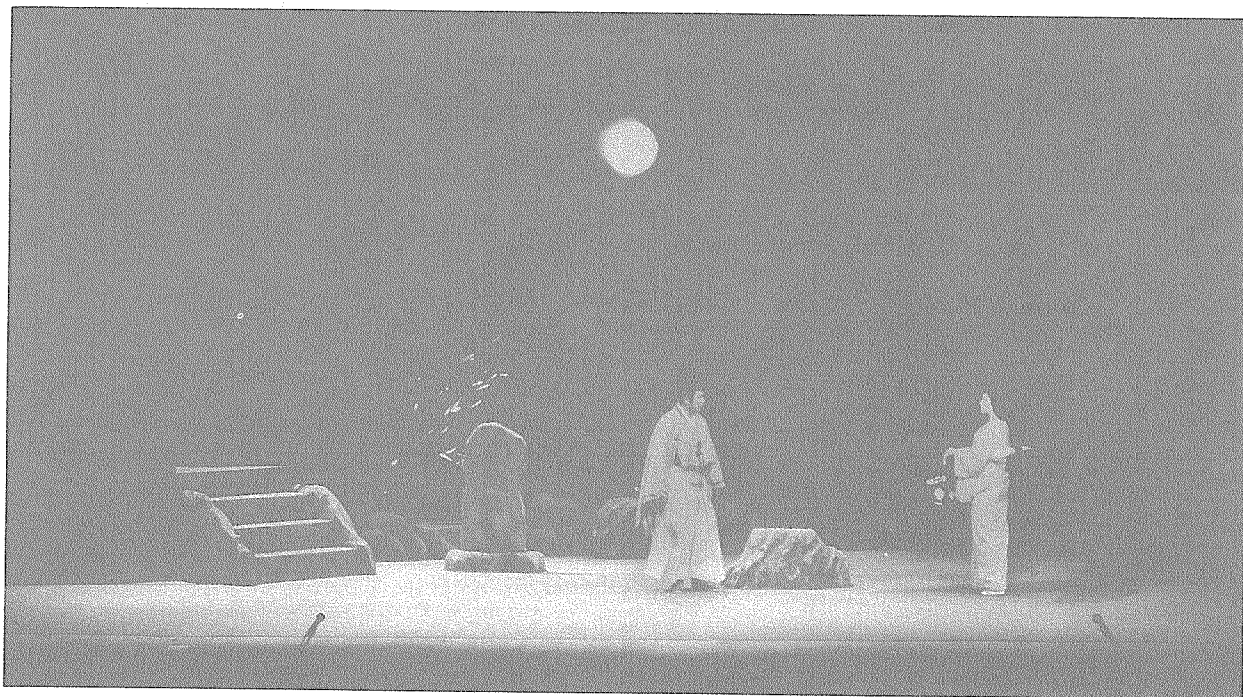
第2場でも大道具に大きな変更がありました。

打ち合わせの段階から第2場では、空の部分をホリゾンを使って表現することになっており、道具帳や平面図でも舞台奥は遠見の山や川が切り出しでつくられ、その向うはホリゾンになっているというものでした。

ところが、実際に道具が飾られてみると、空や遠見の山、そして川の流れまで描かれた背景のドロップがホリゾンの前に降りているものでした。

第2場 月明りの場面

ホリゾンに投影する予定だった月は、装置がドロップに変更されたことで、準備したエフェクトマシンは使用できなくなりました。結局、現場での工夫によってピンスポットライトで月の出入りを表現する方法が取られました。



第2場では、月光による舞台の明るさと月が隠れたことによる暗さが演出上の重要な条件になっています。

この月明りについては、稽古に入る前に、月を実際に出すか、月光だけの表現にするかということが検討されました。その結果、より舞台効果をあげるために月を見せる方向で照明プランを考え、しかもその方法は月が雲に隠れて、また雲間から出てくるという表現を取ることになりました。

第2場の照明プランの基本は、道具帳に基づいてホリゾントに月の出入りを表現し、それに伴って舞台に月明りや暗闇の状態をつくるというものになりました。

このプランのために、月が雲に隠れて、また雲間から出てくるようすをエフェクトマシンでホリゾントに投影できるような仕掛けをつくり、舞台のライトブリッジに準備しました。この仕掛けは、月の種板の大きさ、ホリゾントへの距離、レンズのフォーカスの大きさ、月の位置や大きさに合せた雲の大きさなど、あらかじめ全てを計算しておかなければなりません。

ところが、ホリゾントの前にドロップが降りることになり、そうした計算や準備したものが全て使えなくなりました。しかし、月が雲に隠れて、また雲間から出てくるという照明効果は、第2場の照明プランの重要な要素ですので取り止めることはできません。月を出すためのアイデアは白紙の状態にもどり、現場で一からやり直しになったのです。結局、月の出し入れはピンスポットライトを使用したものになりました。こうした思いがけない変更に対応するために、現場では大変苦労することになりました。

◆◆橋の装置と人物の動き

また、第2場には下手側に橋の装置がありました。こうした装置は実際にどれくらいの高さと大きさでどういうふうに架かっているのか、実際に道具が飾られてみなければ実感としてわからないものです。

特にこの場面では立回りがあつたり、多数の人物の出入りがありましたので、橋を使った人物の動きを稽古場では十分に計算できませんでした。したがって、舞台稽古に入ってから、人物の動きを修正、変更することで、

ダイナミックで緊迫した舞台がつくられることになりました。

このように稽古場で稽古を積み重ねてつくりあげても、実際の舞台でないとわからないことがあるものです。稽古場では予測がつかなかったことや、現場で生じた思いもかけない事柄に充分に対応していくためにも、舞台稽古の時間というのは余裕を持ってスケジュールに組み込んでおくことが必要だといえるでしょう。

◆◆花道を使った出入り

第3場の幕が開くと舞台の明りと一緒に下手側の花道にも明りが入ります。

下手側の花道の彼方に頼家の館が設定されており、その館への夜討ちを知らせる早鐘が鳴り響く中、舞台では緊張感を漂わせた夜叉王がさかんに花道の方を見やっています。

やがて、かえでが花道から走り出てきます。このかえでの登場のために、幕開きと同時に花道に明りが入っていたのです。

しばらく後に、春彦も同じように花道から走り出てきます。幕開きから春彦の登場まで花道の明りはそのままになっています。

こうした花道を使つての人物の出入りがある場合、通常は人物の出入りごとに花道を明るくするという方法がとられることが多いようです。この舞台の場合もかえでが花道から登場した後、花道の明りを半分位に落として暗くし、舞台の方へ観客の目を集中させ、次の春彦の登場ではまた明るくするといった方法も考えられました。しかし、かえでと春彦の登場の間が時間的に短く、その間に花道を明るくしたり、暗くしたりするのはかえで不自然に感じることや、舞台の演技が花道の彼方に設定してある頼家の館の人を案じ、その方向を何度も見やっているとといったことから、春彦の登場まで花道を明るい状態のままにしました。

つぎに、頼家の仮面をつけたかつらが同じ花道から登場する時には、一旦落とした花道の明りを再び明るくし、さらにフォロー明りも併用し、かつらに観客の視線が集まるように明りをつくりました。

*****平成2年度日本照明家協会賞決定*****

第10回日本照明家協会賞の舞台部門の受賞者が次のように発表されました。

大賞・文部大臣奨励賞

沢田祐二 (勝沢田オフィス)
勝沢市民オペラ「ファウスト」

優秀賞

高沢立生 (尚舞台照明劇光社)
チャイコフスキー記念東京バレエ団「ザ・カブキ」

倉田敏文 (エフェクト)
宗教法人 赤間神宮「八雲怪談シリーズⅥ 草ひばり」

後藤正隆 (尚ユニーク)
佐藤朱音バレエ研究所「ジゼル」

奨励賞

松永 宏 (旭川市民文化会館)
夏の夜の夢実行委員会「夏の夜の夢」

杉浦弘行 (大庭舞台美術・照明研究所)
ダンスワークス「ダンスヴァンレーション」

根本一美 (勝バリライトアジア)
クラブチッタ 安全地帯「夢の都」

三上良一 (大庭舞台美術・照明研究所)
るひいな実行委員会 楽劇「るひいな」

山崎一男 (勝農野舞台)
声楽家集団土の会 オペラ「魔笛」

沖田幸伸 (勝藤本照明)
日刊芸能通信 舞踊「やすらぎの道」

新人賞

佐藤律子 (勝ほりそんとあーと)
劇団デザートメントシアター・アレー「おやすみ1991」

田中一由 (勝ステージユニオン広島)
今井バレエダンススタジオ「おどるために生れて」

日高仁志 (勝九州共立)
神崎バレエスタジオ グランドバレエ「ねむりひめ」

◆◆幕切れの明り

幕切れの明りは、死んでいくかつらの姿と、娘の死を悲しむよりも断末魔の表情を面づくりのために描こうとする夜叉王を強調することによって、劇的な結末を観客に印象づけることを考えました。

また、夜叉王を強調する一方で、瀕死の状態を春彦に抱きかかえられ、苦痛を耐えて父の求めに応えようとするかつらの断末魔の表情も幕切れのポイントとして大切です。

参考のために、幕切れの照明づくりの実際について少し詳しく述べてみましょう。

幕切れの舞台では、夜叉王とかつらの位置はかなり離れています。夜叉王は座敷のやや上手寄り、かつらは庭のやや下手寄りで、二人の顔の向きは、夜叉王が下手の下方を見下ろし、かつらは上手の上方を向くこととなります。

幕切れの明りとして、ことさらに何かを強調しようとするような場合は、必ずしもその場面の光のデザインにこだわる必要はないのですが、この芝居についてはなるべく芝居の流れの延長上で幕切れの明りをつくることに

しました。

幕切れの時の二人を照らしている明りの光源を写実的に考えれば、夜叉王を照らしている明りは、娘の表情をよく見て描くために部屋の奥から手元に運ばせた燭台の明りです。

また、かつらの方はかえでが差し出している燈籠の明りになります。これらの明りはどちらも二人の顔を照らす方向からの明りではありません。

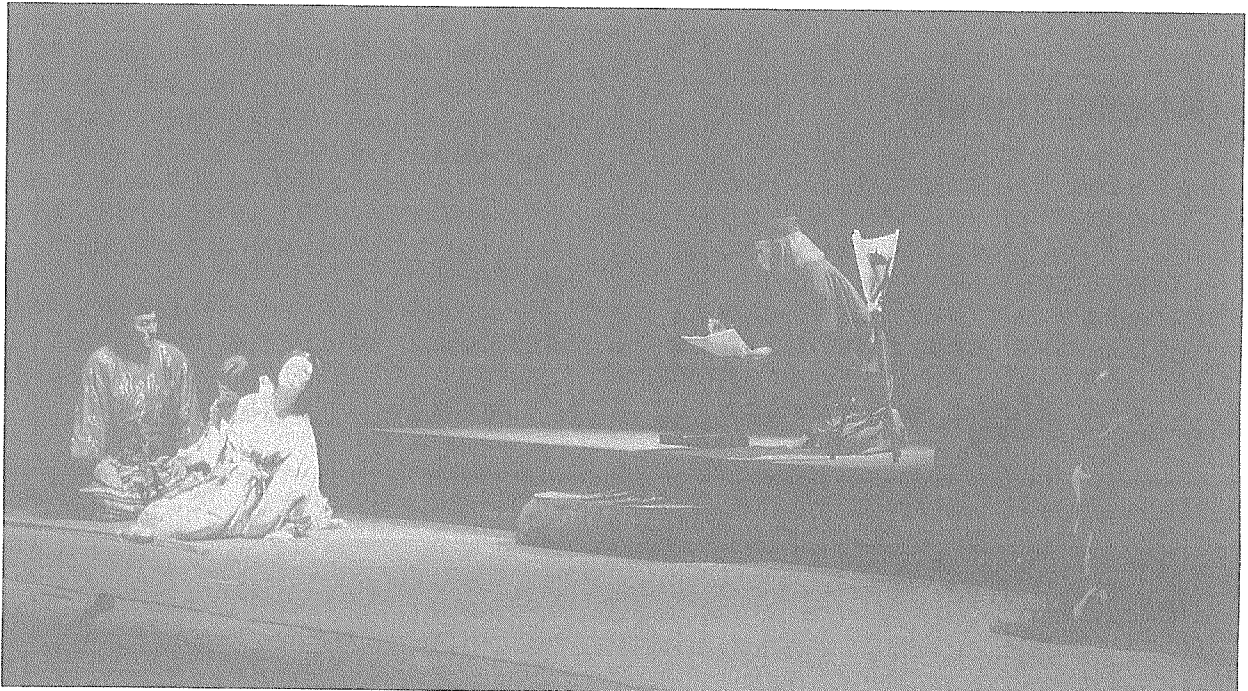
このような状態から最初の幕切れの明りをつくるわけですが、前にも述べたようにあまり極端に芝居の流れから離れる明りにはしたくありません。そこで、夜叉王に対しては燭台の明りと同じ色で、夜叉王の姿にハイライトが強く出るようにややバックライト気味の光を当てました。さらに、このハイライトの明りによって夜叉王の顔がやや暗く見えるので、表情がよく見えるように顔に対する補助光を明るくしました。

かつらに対しては、かえでが差し出す燈籠のほかに、上手前方から月光の明りをつくることで、顔を見せるための明るさをつくっていましたが、この月光の明りの光量を増し、顔の部分を一層明るくすることで幕切れの明りにしました。

こうした幕切れの明りによって、夜叉王の鬼気迫る表情とかつらの哀れな姿を観客に印象づけたのです。

第3場 幕切れの明り

息も絶え絶えのかつらの姿は上手前方からの月光の明りによって見せ、かつらの表情を描く夜叉王には手元に置かれた燭台の明りと同じ色の明りをバックライト気味に当て、その姿を印象深く浮き上がらせ、劇的な幕切れの明りをつくりました。



(写真提供)修善寺観光協会 (撮影)田口行央©V.TAG.

新刊紹介

シリーズ 初歩の舞台照明Ⅰ

美しい光を得るために ● 照明機器を身近なものに

著 / 岩崎令児

『舞台用語解説』を執筆いただいています岩崎令児氏の舞台照明入門書が、(社)日本照明家協会から出版されました。本書では照明器具を扱う上での初歩的な知識や明りのつくり方が図版や写真を用いてわかりやすく解説されています。技術的な面では、ベンチの持ち方といった細かいところまで目が配られており、初心者には親切な入門書となっています。また、現場での仕事に即して明りづくりの実際が紹介される一方、照明器具を理解する上で重要となるスポットライトの光学的なシス

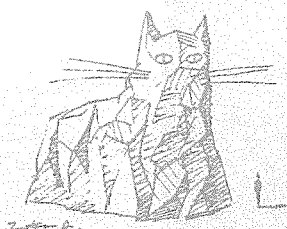
テムについても詳しく述べられているなど、明りづくりの全体を知る上で大変参考になります。本書は丸茂電機株式会社でも取り扱っておりますので、ご希望の方は現金書留で書籍代を「マルモ・ライティング・ニュース」編集部宛にお送りください。

● 定価 / 1,500円(消費税込み)



舞台用語解説

2



岩崎 令兒

◎舞台の名称に関する用語

舞台

ぶたい Stage

演技の行われる場所。舞台には額縁（プロセニウム・アーチ）を持たない観客席に突き出したエプロン式のもの、額縁によって観客席と舞台とを隔離した形式のもの、そしてこれらの混合形式のものがあります。

下手/下

しもて/しも

観客席から舞台に向かって左側のこと。日本独特の客観的言い方です。西洋では舞台から客席に向かって右(right)といます。

上手/上

かみて/かみ

観客席から舞台に向かって右側のこと。日本独特の客観的言い方です。西洋では舞台から客席に向かって左(left)といます。

プロセニウム・アーチ

Prosceniumtarch

舞台の額縁のこと、これで舞台と観客席を区分します。

アクティング・エリア

演技面、Actingarea

舞台面積のうち、大道具背景に囲まれ、出演者が演技を行うスペースのことを大づかみにいいます。

シーナリー・スペース

Scenery space

アクティング・エリアを囲んでホリゾントまでの間に、大道具を飾ったり、照明器具を設置したりするスペースのことです。

舞台奥

ぶたいおく、Up stage

舞台後方のことで、舞台前(Down stage)に対応する呼び名です。ヨーロッパの劇場では舞台の床は後方が高く僅かに傾斜しているためにUp、Downと表現されています。

舞台端

ぶたいばな

舞台と観客席の境界。框(かまち)または雨落ち(あまおち)と呼ぶこともあります。

舞台袖

ぶたいそで

観客席からは見えない舞台の下手、上手の空間のこと。(ふところ)とも呼ばれています。

芯

しん、Center

舞台間口の中心から舞台奥へ引いた中軸線を芯といいます。センターラインなので図面等ではCLと添え書きすることがあります。

◎舞台での作業に関する用語

暗転

あんてん

照明を消して暗い中で舞台転換することをいいます。

明転

あかてん

暗転の対語。舞台が明るいまま舞台転換すること。いどころ替わりや回り舞台による転換で使われることが多く、舞台裏の見切れをぼかすために多少光量を落とす場合もあります。

ダーク・チェンジ

Dark change

照明を消した暗い中で舞台転換することをいいます。(暗転)と同義語。

ばらす

ばらす

セットしてある道具、機器などを撤収すること。また、不用になった大道具などを解体すること。または、処分すること。

飛ばす

とばす

吊り物を上昇させること。

殺す

ころす

照明機器などの機能を停止させること。また、昇降装置の綱元をロックすること。また可動する装置などを固定すること。

飾る

かざる

大道具を舞台に組み立てること。飾り込み、建て込み、組み込みなどともいいます。

参考資料

『舞台・テレビジョン照明(基礎編)』(社)日本照明家協会編
『演劇小辞典』(石崎一正・泉三太郎共著)タヴィッド社
『プロ音響データブック』(株)リットーミュージック社

福野文化創造センター

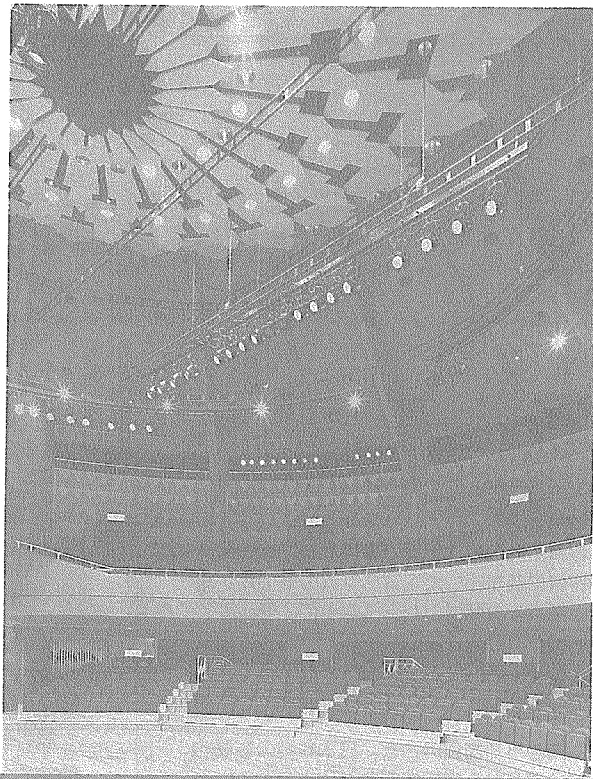
円形劇場(HERIOS)

富山県東礪波郡

毎年5月1、2日、夜を徹して「夜高節」が歌われるなか、7メートルにおよぶ大行灯の揺れ動く燈が夜空を彩り、夢幻の世界が繰り広げられる福野町の「夜高祭り」。近くには飛騨高山の「高山踊り」、郡上八幡の「郡上踊り」、越中八尾の「風の盆」など、全国に知られる伝統を受け継いだ幻想的な盆踊りや祭りがああります。礪波平野の南西、小矢部川沿いの町、福野に伝わる「夜高祭り」もそのひとつ。慶安初年から、福野の歴史を見守り続けた300年をこえる伝統が息づいている祭りです。

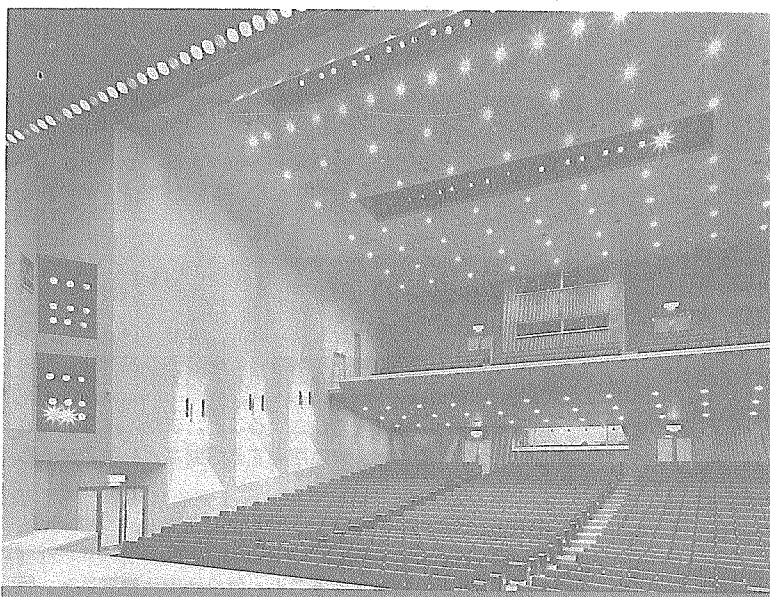
この福野の町に「HELIOS(ヘリオス)」と名付けられた最新の円形劇場が誕生しました。六分割の迫舞台と客席収納床を持つ斬新な機能性、自由に大胆な演出意欲をかきたてる舞台空間。ギリシャ神話の太陽の神「HERIOS」の名をかかげた超モダンな円形劇場の出現は、古い伝統が伝わる町に限りなくひろがる可能性を与えてくれます。

伝統を踏まえながら、最新の技術を意欲的に取り入れた円形劇場で、これから展開される舞台芸術の数々。その意欲に満ちた創造の息吹きに、実績の確かさと先進のテクノロジーに裏打ちされたMARUMOの明りが鮮やかに輝きます。



千葉県東総文化会館

千葉県旭市



次世紀を視野に入れ、意欲的な都市づくりが進む千葉県。ここでは、地域の文化活動の場として、また優れた舞台芸術の鑑賞の場として千葉県文化会館が大きな役割を果たしてきました。その貴重な実績に加えて、より広範囲で密度の高い文化活動の場が新しい都市生活の発展と共に求められています。こうした要請に応えて誕生したのが千葉県東総文化会館です。この会館の建設にあたっては、より機能的な会館運営、使いやすい設備・機構など豊富なノウハウを持つ千葉県文化会館の職員の方々のアドバイスが随所にいかされています。

また、地元旭市では「ふるさと創生資金」を文化活動助成に活用。千葉県東総文化会館の開館を期に、市民芸術鑑賞団体が招聘するコンサートや演劇公演をはじめ、市民による日舞や民謡の発表会、イベント開催には会場使用料の助成がおこなわれています。

気軽に使用できる会館として、市民の文化活動を一層豊かにしていく千葉県東総文化会館。この新しい市民のための会館でも、数々の劇場や公共の会館で優れた実績を持つMARUMOの記憶付照明システム「マリオネット」が導入され、経験豊かな明りづくりの現場の人々から絶大な信頼を得ています。

●発行——丸茂電機株式会社

〒101 東京都千代田区神田須田町1-24 ☎03(3252)0321(代)

●編集責任者——井上利彦

編集協力——小川昇舞台総合研究室 レクラム社

●マルモ・ライティング・ニュースは、無料で皆様にお届けしております。ご希望の方は、丸茂電機(株)までお申し込みください。尚、転勤、転居などで住所変更の場合は、その旨ご連絡ください。

●このニュースは弊社からお届けします。